

## 正林先生との思い出

片山 巳貴子

正林護先生の古稀をお祝いするにあたり、教えを賜った一人として、先生との思い出を語らせていただきたいと思います。

私が長崎県教育庁文化課に嘱託として働き始めたのが、昭和53年。今から20年も前のことです。その頃先生は調査係のトップで、私を含め同期の5人を指導する立場にいらっしゃいました。当時、九州横断道路や中核工業団地の開発に伴う発掘調査は、連日続いていました。調査係も大所帯で、それをまとめる正林先生のご苦勞もしのばれますが、今思うと、いつもひょうひょうとしておられた印象しかありません。

私が文化課に在籍していた5年間の間、発掘現場にもご一緒しました。

現場に出ても、自分から身体を動かし、手伝いにきてくれた地元の方とも仲良くなり、和気あいあいとした独自の正林ワールドを作ってしまう。だからこそ、私にとっても現場での楽しい思い出しか残っていないのだろうと思うのです。

対馬の金石城の調査で、私がトランシットをうまく設置出来ずに手間どっていた時、たまたま町教委の方が見学にいられて、あせってしまったことがありました。その時先生は、私を注意するのではなく、設置する時間を与えるために、町教委の方と意識して長い話をされて、フォローして下さったようです。

また島原半島の礫石原遺跡の試掘調査の際、先生が表採した土器が重要資料だったので、宿に戻って食卓の上で、ガネ（島原カニ）を横に見ながら、二人で破片を復原したのを覚えています。

そのあったかい笑顔は、20年たった今でも変わらず、周囲の人の心を温めてくれます。「考古学」という学問をずっと貫いてこられた姿勢はまさに見事だと思います。

それにしても、先生のバイタリティーのエネルギーは焼酎であろうと、私は秘かに確信しているのです。

長崎県考古学会の会長でもいらっしゃるし、いろいろな場所で講演もなさっているのですから、エネルギーもほどほどに、健康にだけは留意なさってください。

古稀すぎて、なおのご活躍を祈念いたしております。